

自閉症の知覚から分かること

——障害とは何か、何が障害を命じるのか——

河野 哲也

1. 現象学と当事者性

本論で、私は、他者の経験報告を観察データとして認める（ダニエル・デネットの用語で言う）「ヘテロ現象学」が、いかに障害や疾病の理解にとって重要なかを改めて訴えようと思う。

現象学の第一の任務は、当事者の経験に関する、当事者による、理論化される以前の語りを紡ぎ出すことにある。科学理論がもたらす抽象化によって見逃されてしまう微細だが当人にとっては重大な意義を持つ経験の具体的相貌、理論の枠に収まらないゆえに研究の焦点からは外れてしまっている経験の特殊な諸相、科学理論による画一的で統合的な把握によっては捉えられない複線的な諸経験のあいだの複雑な葛藤と衝突、まだ根源的に意味が不確定であり、当人にも他者にも多義的に留まるような経験。現象学の任務は、これらの経験を救い出し、記述することにある。

たしかに、経験をそのままに記述すると言っても、私たちは特定の意味を担った自然言語を用いているのだし、私たちが理論的な予断を無意識的を持ってはいないと断定することはできない。しかし、当事者の立場からの経験の記述は、科学理論に基づいた観察とは、やはり大きく異なる。科学的な観察は、あらかじめ決められた方法と手順に則り、定められた器具や装置を用いて行われる仮説-演繹的过程である。そして、その方法や手順、器具と装置は、一定の理論的投企を実体化したものである。

これに対して、自然言語による経験の記述は、身体とその実践的な延長物（たとえば、眼鏡、衣服、身近な道具や器具）を用いて、とくに一貫した理論的投企を行うことなく、仮説を含んだ方法ではなく異質な要素と偶然性をはらんだ

関与によって行われる。経験に関する日常的な語りは、悪く言えば曖昧であり、よく言えば柔軟である。これは自然言語の特性でもある。自然言語が理論言語のメタ言語であるとするならば、現象学的記述は理論的な対象記述・観測のメタ記述であるはずだ。

さらに、当事者による経験の現象学的記述は、ひとつの特権性を持っている。ここで言う特権性とは、デカルト劇場に結びついた一人称権威のことではなく、当事者による知覚経験の報告は、それがそのまま当人の行為の説明になるということである。現象学は、意味に満ちた経験を記述する。ここでの「意味」とは、行為を動機づけるということである。すなわち、ある対象のある側面が「意味を持つ」と言うときには、その側面が、他の側面や他の対象に注意を向けるように当事者を促していること、あるいは、その対象に特定の行為を差し向けるように当事者を促していることを述べているのであり、その対象の知覚が純然たる認識ではありえず、行為への準備となっていること、むしろ、行為の潜在的な先取りを知覚が行っていることを述べている。一言で言えば、知覚された世界は当事者の行為の理由となっているのだ。そうした、意味づけられた＝動機づけられた経験の記述こそが、現象学的な記述である。

ところで、知覚の哲学とは何を論じるものなのだろうか。知覚の哲学とは何のためにあるのだろうか。少なくとも私にとっては、それは、当事者と世界との実践的な関わりを描き出すためのものである。もう少し文脈を限って言うならば、従来の科学理論の枠組みではこぼれおちてしまうような、私たちと世界との交流を再発見する試みである。近年、現象学的な知覚経験の記述に関しては、重要な試みがいくつも出版されている。たとえば、神経疾患や脊椎損傷患者へのインタビューから生まれてきたジョナサン・コール (Jonathan Cole) の『顔について』(1999) や『静かな生活』(2006) に見られる身体損傷の現象学、西村ユミの『語りかける身体』(2001) や『交流する身体』(2007) に代表される看護現象学、熊谷晋一郎『リハビリの夜』(2009) に代表される障害当事者研究、川口有美子による ALS (筋萎縮性側索硬化症) に罹患した母親の介護の記録である『逝かない身体』(2009) などがそうである。(熊谷晋一郎は小児科医であるが、『リハビリの夜』では、医学的な知識を用いながらも、当事者としての立場から語っている。)

患者や障害当事者、介護者、そして看護師といった従来の臨床的な科学知のなかでは周辺視されてきた人びとから、こうした重要な報告と研究が出てきたことは注目すべきである。

現象学とは語りである。現象学とは、自然言語で日常的な語り口で経験を語ることである。しかし、現象学的記述が単なる日常会話と違うのは、そこにテーマがあり、そのテーマとなる経験の中核的特徴を抽出することが目指されているからである。現象学的記述のテーマは、日常的ではなく、学術的である。したがって、現象学的記述は、従来の学術における理論知が見逃してきた当事者の経験を改めて取り上げ直すことに、その趣旨があると言っても過言ではないだろう。

しかし、語るには権力が必要である。メッセージは、命令と同じ効果を持つ。語りの発信がどこからどこへ向けてなされるかは、その社会の権力構造をそのまま反映している。現象学的記述が学術的な「語られたもの」となるには、それを可能にする権力の分与が必要とされる。これまで当事者が沈黙を強いられてきたのは、語る権力を与えられなかつたからであり、当事者たちも自分たちの語る権限に十分に気づいていなかつたからである。よって、現象学は、それが「事象そのもの」の記述を目指すものである限り、これまで学術的・科学的な知が語る権力を独占していたことを批判し、当事者に語らしめること、そして、その語りを学術と科学の現場に差し戻し、当事者の語りから知を再構成することを目指さなければならない。現象学は、最終的に、専門知・科学知の権力に抗して、当事者の語りに優先権を与える政治的な志向を持たなければならぬはずだ。これが知覚の哲学の最終的に目指すべき地点である。

しかし残念なことに、多くの現象学者の自覚は鈍い。権威あるテキストや研究者の発言を反芻することは、「事象そのもの」に向かう態度からはとても遠い。現象学的に研究すべきテーマについて、経験の当事者に語らしめるどころか、現代においては射程がほぼ尽きている古典に、何かと言えば立ち戻ってしまう研究姿勢は、端的に権威主義と言うべきだ。それは、経験している当事者に耳を傾けるのではなく、権威者に耳を傾ける態度だからである。組織論的に見れば、それは、現場に赴くのではなく、常に上司の方を向いて仕事をしているような、タテ型社会の組織人の態度である。こうした態度からは創造的知は生ま

れにくらいばかりか、科学がときに加担してしまうような——フッサーが『ヨーロッパ諸科学の危機と超越論的現象学』で批判したような——知による経験の抑圧に加担することになるだろう。

私は、あらかじめの理論化に抗して、経験そのものに忠実な語り、すなわち、当人において知覚することが行為の理由となるような経験についての語りを取り上げよう。私が関心を持っているのは、「自閉症（スペクトラム）」と呼ばれる人びとの知覚の現象学である。

2. 自閉症なるもの

自閉症は、それがどのような障害であるのかの把握が困難で、定義が揺れてきた障害である。

自閉症の一般的な理解を言うならば、社会性や他者とのコミュニケーション能力の発達が遅滞する発達障害の一種と見なされている。もちろん、この定義は非常に単純化したものであるが、医師や特別支援の教育者、そして一般の人びとにも、かなり流通した定義である。自閉症と見なされる典型的な行動パターンは、民話や昔話、日本の落語にも出てくるが、それを、自閉症（autism）と名づけたのは、アメリカの児童精神科医レオ・カナー（Leo Kanner）である。彼は自分のクリニックを訪れてきた子どもたちが、他者との感情的接触の欠如や常同傾向やこだわり行動、コミュニケーションの問題などの共通の特徴を示していることを 1943 年に論文で発表し、「早期乳幼児自閉症」と名づけた（Kanner 1943）。カナーは、この子どもたちの症状を、統合失調症において他人との関わりを絶とうとする陰性症状である「自閉」と関連づけて理解したのである。この言葉の含意によって、自閉症と診断された人びとは主にその障害の中核が、社会性やコミュニケーションにあるとされてきたし、現在でもそうである。ここから、自閉症が、内向的な性格やひきこもるようなうつ状態として誤解されることもしばしばである。

現在の自閉症は、典型的なものから軽微なものまで連続体（スペクトラム）をなしているとされている。そのなかの一部として、たとえば、アスペルガー症候群は、言語による会話能力があるが、自閉症の特徴を持つ発達障害とされ、

高機能性自閉症とは、知的障害のない、あるいはほとんどない自閉症とされている。しかし、後者は医療的な診断名ではなく、教育や心理学で用いられる用語である。後者をアスペルガーと同じと考える人もいる。

自閉症の原因については、1960年代のカナーは後天説である心因疾病論（家庭教育や環境に問題があるとされた）を提示し、ベッテルハイム（Bettelheim 1973, 1975）は、自閉症は育て方の問題から生じる障害であり、いわば母原病であるとしたが、これらの後天説は現在では退けられている。1970年代になると、イギリスの精神科医、マイケル・ラターが先天説を唱えた。この先天説的な観点は引き継がれ、現在でも先天的な微細脳損傷と考えられている。ただし、脳損傷を生じる原因はさまざまであり、損傷から症状が発生するメカニズムもそれほど明らかになっていない。

ここでは原因論について詳論することはしない。むしろ、注目したいのは、何が自閉症の中核的な障害かという点である。アメリカ精神医学会『精神疾患の分類と診療の手引き第四版（DSM-VI: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders-IV）』によれば、自閉症障害の特徴は以下のようになる（pp. 55-56）。

- (1) 対人的相互反応における質的な障害で以下の少なくとも2つによって明らかになる。
 - (a) 目と目で見つめ合う、顔の表情、体の姿勢、身振りなど、対人的相互反応を調節する多彩な非言語的行動の使用の著明な障害
 - (b) 発達の水準に相応した仲間関係を作ることの失敗
 - (c) 楽しみ、興味、達成感を他人と分かち合うことを自発的に求めることの欠如（例：興味のある物を見せる、持って来る、指差すことの欠如）
 - (d) 対人的または情緒的相互性の欠如
- (2) 以下のうち少なくとも1つによって示されるコミュニケーションの質的な障害：
 - (a) 話し言葉の発達の遅れまたは完全な欠如（身振りや物まねのような代わりのコミュニケーションの仕方により補おうという努力を伴わない）
 - (b) 十分会話のある者では、他人と会話を開始し継続する能力の著明な障

害

- (c) 常同的で反復的な言語の使用または独特な言語
 - (d) 発達水準に相応した、変化に富んだ自発的なごっこ遊びや社会性をもった物まね遊びの欠如
- (3) 行動、興味、および活動の限定された反復的で常同的な様式で、以下の少なくとも 1 つによって明らかになる。
- (a) 強度または対象において異常なほど、常同的で限定された型の 1 つまたはいくつかの興味だけに熱中すること
 - (b) 特定の機能的でない習慣や儀式にかたくなにこだわるのが明らかである。
 - (c) 常同的で反復的な街奇的運動（例：手や指をばたばたさせたりねじ曲げたりする、または複純な全身の動き）
 - (d) 物体の一部に持続的に熱中する。
- B. 3 歳以前に始まる、以下の領域の少なくとも 1 つにおける機能の遅れまたは異常： (1) 対人的相互反応、(2) 対人的コミュニケーションに用いられる言語、または (3) 象徴的または想像的遊び

項目の優先度から言って、この診断基準では、「対人的相互反応における質的な障害」を、自閉症の中核的特徴として捉えていることは明らかである。

1980 年代後半から 90 年代になると、社会性とコミュニケーションの障害という自閉症の定義を裏打ちするように、バロン=コーベンを中心にして、「心の理論」説に立った認知科学的な自閉症理解が台頭してきた (Baron-Cohen 1997; Baron-Cohen et al. 1985; Baron-Cohen et al. 1997)。「心の理論」とは、他者に心を帰属させ、それに基づいて他者の行動を理解・予測・説明するような能力一般を意味する。心の理論説によれば、私たちは心の理論という内的機構を通して他者を理解するという。バロン=コーベン (Baron-Cohen 1997) は、他者の心を「読む」ためのモジュールとして、意図検出器 (Intentionality Detector)、視線検出器 (Eye-Direction Detector)、注意共有の機構 (Shared-Attention Mechanism)、心の理論の機構 (Theory-of-Mind Mechanism) の四つを想定している。そして、自閉症では、行為者と対象と自己の間に構築されている三項関係の理解（注意

共有の機構と心の理論の機構)に問題があるとされる。

バロン=コーエンたちは、自閉症の中核はこの「心の理論」能力の損傷にあると主張し、この考えは、いまでも医学や発達心理学、特別支援教育で標準的な見解となっている (Frith 2009; Happé 1997; 子安 2000; 熊谷高幸 1993; 杉山 1999, 2002)。自閉症が広範で多様な広がりを持つ連続体をなしていると指摘したイギリスの精神科医、ローナ・ウイングも、「社会的相互交渉の障害」「コミュニケーションの障害」「想像力の障害」「反復した常規的動作」をその特徴としてあげている (Wing 1998)。(しかし、「想像力の障害」は自閉症の定義として問題があると言われる。)

3. 当事者にとっての自閉症

私が特別支援教育に関わるようになったのは、1989年からであるが、主に運動障害の研究に関わっていた。神奈川県にある国立の特殊教育総合研究所（当時、現国立特別支援教育総合研究所）の特別研究員として、現象学的な身体論の立場から、身体と運動、そして身体表現の教育的な意味について、障害児教育の専門家や現場の教員の方たちと共同研究していた。そのなかで、自閉症と呼ばれる子どもたちと接する機会を得たのであるが、当時から、DSMのような医学的な自閉症の定義に以下の二つの点でかなりの疑問を抱いていた。

第一に、「自閉症」としてくくられる子どもたちの振る舞いが単一の障害としてくくることができるかどうか分からないほど多様だったことである。この疑問は、ウイングが提案した「自閉症スペクトラム」という概念によってかなり解消されたが、現在では、自閉症スペクトラム自体がさらに広範な障害の一部をなしているのではないかという疑問を持っている。

第二の疑問は、より深刻である。それは、「自閉症」という統合失調症の陰性症状に起源を持つ名前とその中核的特徴に関する定義が、実は間違っているのではないかという疑問である。つまり、自閉症において、社会性やコミュニケーションの障害が、障害の本体だろうかという疑問である。

もちろん、自閉症に接した人も、当事者たちも、言語の運用や他者との交流に困難が存在していることは認めている。そうした問題が存在していることは

明らかであり、それが健常者にとってまずは目につく特徴であることも確かかもしれない。しかし、そうした社会性やコミュニケーション上の問題があることと、それらが障害の中核であることとは別である。

こうした従来の自閉症の定義に私が疑問を感じたのは、現場の教員や保護者のかなりの数の人が、社会性やコミュニケーションよりももっと基本的であるような当事者の問題に向き合っていたこと、そして何よりも、言語を使えるアスペルガー症候群や高機能性自閉症の子どもたちや人たちから直接に意見を聞いたときに、彼・彼女らの多くがまず訴える問題は別のことであったからである。

その多くの当事者が訴えている問題とは、認知の問題、言いかえれば、感覚知覚と運動の制御の問題に関わるものである。このことは、当事者による自分の状態の報告に示されている。

90年代以降、ドナ・ウィリアムズ (Williams 1993, 1996, 2008) やテンプル・グランディン (Grandin & Scariano 1994; Grandin 1997, 2010; Grandin & Barron 2009; Grandin & Johnson 2006) といった人を嚆矢として、自閉症・アスペルガーの当事者による自分の成育歴や心身状態の報告がなされるようになった (Gerland 2000; Hall 2001; Lawson 2001; McKean 2003; Robinson 2009; Shore 2004; Smith-Myles 2004; Tammet 2007; Willey 2002)。日本でも、2000年代に数多くの自閉症の当事者、あるいは家族による報告が相次いだ (東田 2007; 東田・東田 2005; 星空 2007; 岩永・藤家・ニキ 2008; 泉 2003, 2008a, 2008b; 小道 2009; 森口 2002, 2004; ニキ 2005, 2008; ニキ・藤家 2004; ニキ・仲本 2006; 高森 2007)。

高橋ら (高橋・増渕 2008; 高橋・生方 2008; 高橋・生方・田部 2009) は、アスペルガー症候群または高機能性自閉症の当事者の手記と、当人への質問紙調査を通して、「感覚処理障害（感覚の過敏・鈍感）」の問題を明らかにしている。

たとえば、ニキと藤家 (2004) は、「雨やシャワーが痛い」といった触覚の過敏、「プール消毒が怖く、都会はどこでも食べ物の臭いがする」といった嗅覚過敏、そして、DSMでも指摘されていたシングルフォーカス、すなわち、何かひとつつの刺激に集中的に反応してしまい、他の感覚が抜け落ちてしまう傾向につ

いて語っている。森口（2002: 207）は、以下のように、生き生きと自閉症の感覚世界を描き出している。

電車に乘ると、車内のアナウンスが頭のなかを貫通する。そして電車が込めば込むほど、低周波が全身に襲いかかる。いくらウォークマンとイヤフォンで塞いでみても、地下鉄の雑音は容赦しない。不規則で突発的な過減速。そして予測不能な動きをする人間連の群れ。電車には特有の臭いがある。夏場は身体それ自体から、そして冬場は黴びた衣服の臭いが嗅覚を襲う。たまに香水をふんだんに使っている乗客がいると、それはそれで良くも悪くも私の意識に影響した。その他、いろいろな雑菌やウィルスの臭いもしたので、私はよけいに、人間が嫌いになった。

乗客を人ではなく物体だと思うと、気持ちはいくらか楽になったが、しかしなかには、みずから動いてくる“物体”があつて、私の髪の毛や顔や眼鏡を勝手に動かすので、そのたびに私は手を払ったりして、その報いを受けることもあった。ほとんどの乗客はジェントルだったが、ときにはわざと足をぐいぐいと絡ませて直立を邪魔する人や、吊り革を横取りする人もいた。そうなると平衡感覚が保てなくなり、私は「他の乗客の迷惑」になった。お尻を触る人もいた。

ここには感覚上の問題が、人間の知覚にも影響を及ぼしていることを示している。また、質問紙の報告によれば、自閉症者においては、外的な感覚知覚の問題だけではなく、身体の動き、姿勢、バランス、左右の調整など前庭感覚の過敏や鈍磨、さらに、体内的な固有感覚の問題も顕著である。ここから運動制御の困難も生じてくる。たとえば、自閉症児は身体を振り動かすノッキング動作を行うことがしばしばだが、これは、こうした微妙な振り動かしによって気持ちがよくなり、気分が落ち着くといった効果を持っているからだと報告されている。当人たちは、自分のそうした行動を気にしないでほしいと言っているのである。（いわば、大きな「貧乏ゆずり」のようなものとして理解すればよいだろうか。）

これらの感覚・知覚上の問題は、ウィリアムズやグランディンの著作において

ても、その著作のかなりのページを割いて報告されている。ウィリアムズは、この感性的な知覚世界が「健常者」の世界と違う独自のものであると言い、「私の世界」と呼んでいる。自分たちと健常者とのコミュニケーションの齟齬は、この知覚世界の相違によると言うのである。この主張は、ウィリアムズのみならず、多くの自閉症の当事者手記を書いた人たちの共通の主張である。ニキは、自閉症が、感覚知覚異常という意味で「身体障害」であると主張している（ニキ・藤家 2004）。

これらを、高橋にならって大まかに「感覚処理障害」と呼ぶことにして、160項目のチェック率は多い人で60%強であり、一番低い人では、1%を切っている。個人差が大きいわけであるが、高橋・増渕は、感覚処理障害の問題は当事者にとって、きわめて重大であることを指摘する。「アスペルガー症候群等の当人は通常とは異なる「身体感覚」を持っており、これまで周囲から「わがまま」「自分勝手」などと誤解されていたことが、実はアスペルガー症候群等の特有の過敏・鈍麻にも大きく起因しているのではないかと推定される」(2008:296)。

以上の当事者報告から分かることは、ひとつには、多くの当事者が苦しんでいること（認知の問題）と周囲が当事者に付与している問題（社会性・コミュニケーションの問題）にズレがあることである。自閉症とされる人たちのかなりの割合が、感覚知覚過敏や運動制御に問題を訴えていることは広く知られた事実である。だが、これが当事者にとってもっとも重大な問題であることは、当事者が語り出すまでは十分に認められていなかったかもしれない。

そして、もうひとつは、自閉症の症状とされる症状や行動特性のうち何を中核的な特徴とするかを考え直す必要性があることである。中核であるということは、それ以外の問題がそこから派生するということを意味する。もし、社会性やコミュニケーション上の問題が中核であるならば、常従的な行動様式や認知上の諸問題は、そこから派生しているか、あるいは、それとは独立し平行した障害と見なされるべきであろう。逆に、認知上の問題が中核をなしているとするならば、社会性やコミュニケーション上の問題はそこから生まれるものとして捉えられるはずである。

4. 自閉症はコミュニケーション障害か？

当事者からの報告は、自閉症とは何であるかという定義に関しても、再考を促すものである。いま述べたように、自閉症と呼ばれるものは、感覚知覚的な問題から環境との相互作用形成に影響し、それが対人関係や社会性の発達に及んでいるのではないかという仮説も大いに成立立つ。

たとえば、人の手を物のように引っ張って何かを要求する「クレーン現象」は、人間をひとつの人格としてではなく物として扱っているからだとされてきたが、実は、当事者は、相手のある特定の部分だけに認知を集中させてしまっているからだと解釈可能である。つまり、他者を無視しているのではなく、「他者の手」だけしか手がかりとならない状況にいるのだと理解可能なのである。

自閉症の中核は何らかの認知的な（感覚知覚、運動制御などの）問題にあると考える研究者は、心の理論説を批判する。心の理論説は、すでにシミュレーション説を取る論者によって批判されてきたが（Hobson 2000; 河野 2005）、近年、再び強い批判が生じている（Leudar & Costall 2009）。（余談であるが、心理学や認知科学では、自分の立場を批判する主張が出ても、正否を巡って討論することは少なく、互いに無闇与なままに棲みわけてしまうケースが多いように思われる。哲学を専攻する人間には、正直なところ、理解しがたい態度である。）本論で取り扱う批判は、他者関係よりももっと根本的・一般的なレベルで障害が起こっているのではないかという批判である。

たとえば、認知科学者であり哲学者のシャンカー（Stuart Shanker 2004）は、「心の理論」の障害は自閉症の本質ではないと明言する。そもそも、他者の思考や感情を理解する能力は、心の理論で想定されているように、单一の「他者理解」モジュールによって成立するのではない。他者理解とは、他者と自己との限りのない共制御的な過程であり、子どもはそのなかでこそ、自分の感情や自我の感覚を発展させる。そして、シャンカーは、自閉症の中核障害は、この他者との共制御過程を成立させるための認知的基盤の問題にあると指摘する。「自閉症の子どもがそれほどしばしば社会関係の問題を示す理由は、感覚の過剰・過小反応性 sensory over and under-reactivity が彼らの共制御的な相互作用の経験に加わる能力を阻害しているからだ」（2004: 685）。

しかし、このように考えると、「感覚の過剰・過小反応性」という言葉は、自閉症の認知的な問題を表現するのに適切な用語ではないかもしれない。むしろ、シングルフォーカスの問題、及び、それと密接に関係する中心的統合（セントラル・コヒーレンス）の問題と呼ぶべきかもしれない。

シングルフォーカスとは、ひとつの対象、あるいは、対象のひとつの側面に注意が集中し過ぎてしまい、全体の文脈を捉え損ねてしまうことである。同時に二つ以上の事柄を意識内に捉えることが難しく、ひとつの限局した部分に意識が集中してしまう。たとえば、電話をしながら、料理をしながら、赤ちゃんの安全を確保、といった複合的行動が難しくなってしまうのだ。

ここから、他のものへの注意の切り替えや制御が困難になってしまったり（いわゆる、こだわり行動）、その逆に、文脈につながりがなく注意が移行してしまったりすることもある。そして、全体の文脈や背景を捉える事に問題があること、言いかえるなら、ゲシュタルト知覚に問題があることは、認知科学的な表現をするならば、セントラル・コヒーレンスに問題があるということができるだろう。すなわち、時間や空間の一貫した統合的知覚、事物や人物の統合的知覚、社会的場面の一貫的な理解、コミュニケーションにおける統合性に困難が生じるということである。自閉症の人にとっては、情報のどの部分が必要で、どの部分が不要なのかの判断が難しく、情報を取捨することに混乱を覚える。この考え方は、DSMに見られる症状を全体として説明できるものに思われる。

アスペルガー当事者である綾屋と彼女の共著者、熊谷による『発達障害当事者研究』は、当事者による最も優れた自閉症経験の報告であり、かつ、きわめて優れた自閉症の中核特徴の理論化である。彼らも、独自の表現で、シングルフォーカスとゲシュタルト知覚の問題を指摘している。綾屋・熊谷は、自閉症スペクトラムを「大量の身体感覚を絞り込み、あるひとつの〈身体の自己紹介〉をまとめあげるまでの作業が、人よりゆっくりである」(p. 23) 状態として定義し、自閉症を、感覚統合・意図（実行）統合の問題として捉える立場を打ち出している。

しかし、綾屋・熊谷は、感覚過敏・鈍感は自閉症の知覚的問題を適切に捉えた言葉ではないと指摘する。「自閉について語る専門家言説のなかでは「感覚過敏」「感覚鈍麻」という言葉がよく使われるが、…この分類はあまり本質をとら

えたものではないように思う。私の感覚だと、「感覚鈍麻」といわれている状態は、細かくて大量である身体内外の感覚が、なかなか意味や行動としてまとめあがらない様子のことを指しているのだと思う」(p. 73)。先程、論じたとおり感覚過敏・鈍磨は、知覚が「まとめあがらない」状態、すなわち、統合的・ゲシュタルト的でない状態として理解し直すべきなのである。

綾屋・熊谷の分析は、自閉症研究を超えて、知覚の哲学として重要な指摘に満ちている。たとえば、綾屋は次のように指摘する。

刺激の一部が対象＝モノとして背景から絞り込まれる（対象の絞り込み）。そしてモノは、自分は何者であるかについての（自己紹介）と、自分によってどのような行為が可能になるかについての（アフォーダンス）をまとめあげる（意味のまとめあげ）。先述したように私の場合は、いったんできあがった「意味のまとめあげパターン」がほどけやすく、刺激の段階にまで戻りやすい。(p. 76)

したがって、意味とは、ゲシュタルト的に統合された経験に「自己紹介」として宿るものであり、さらにどのような行為が可能になるか（アフォーダンス）も、そのまとめあげのなかに書き込まれているのである。しかし、知覚世界のなかに書き込まれた行為可能性は、あまりに多様である。外界は数多くの情報に満ちあふれている。「それら大量の情報を、その時々の私の身体内部からの情報とすりあわせ、絞り込み、〈したい性〉や行動をまとめあげていかなければならない」(p. 76)。しかし、自閉症では、情報の絞り込みやまとめあげがゆっくりであるがゆえに、感覚情報が乱立して飽和を起こし、行動がフリーズしたり、パニックに陥ってしまったりするのである。「モノのアフォーダンスは、ただ大量にあふれかえる行動の選択肢としてだけインプットされていく。その結果、絞り込みがゆっくりでまとめあがらずに乱立した（刺激）（モノの自己紹介）（アフォーダンス）が頭の中にあふれていくため、頭ががちがちになり、苦しくなって、パニックを起こすことになる」(p. 69)。

このように、知覚のまとめあげの困難は、意図のまとめあげ、行為のまとめあげの困難と等価なのである。

5. 自閉症と奥行き知覚

さらに、綾屋は対人関係に関しても興味深い指摘をしている。

私は「その人自身」になってしまったら困るので、できるだけ他者の情報から自分を遮断したいと思う。人と会ったり、テレビや映画を見たりすると、その人の表情や動作がどんどん写真記憶としてたまっていってしまい、私の行動を乗っ取ろうとするからである。(p. 102)

この説明にしたがえば、自閉症とは、他者から「自閉」しているのではまったくないことになる。他者の知覚は、健常者においても、潜在的な模倣や運動触発を引き起こす。この他者知覚と運動の直接的な結合は、古くは発達心理学者のアンリ・ワロンの模倣行動の説明、メルロ=ポンティの身体図式を介した他者把握、近年では、ミラーニューロン説によって指摘されていることである。綾屋によれば、自閉症の人は、この運動触発的・模倣触発的な知覚（情報）の絞り込みも十分ではない。よって、さまざまな他者のさまざまな相貌と運動が、絞り込まれずに、自閉症者のなかに運動触発性を湛えたまま蓄積されることになる。この他者による「乗っ取り」を避けるために、綾屋は対人関係を制限しようとするのである。

情報を絞り込むことが、すなわち、まとめあげることになっているような知覚。これをジェームズ・ギブソンは、環境の不变項の抽出と呼んだ。それは、変化項と不变項を運動的な過程によって選り分け、対象の不变的な特徴をピックアップする過程である。自閉症においては、動的事象の知覚の困難性と、静止形態知覚の優位性とが共存して見られる場合が多い。これは、変化の凍結された静止イメージの知覚に優れる反面、変化のパターンとしての不变項の知覚に困難を抱えていることを意味していると解釈できる。

バロン=コーベン（1997）は、自閉症は他者の行動をうまく理解できていないことを示すのに、ひとつの質問の例をあげている。「ジョンは寝室に入つてうろうろ動き回り、そして出てきた。なぜ、彼はこのように振る舞ったのか」。こ

のような質問に対して、健常者は、「探し物をしていた」「怪しいもの音を聞いたので、音源を調べにきた」「自分で何をしようとしていたか忘れたので、部屋に戻って思い出そうとした」などと、心的状態に言及した解釈を行う。

これに対して、自閉症者は、「ジョンはただ寝室に入って出ていただけ」と回答する。この回答をもって、「他者の心を読めない」と解釈されてしまうのである。しかし、自閉症に問題があるのは、「寝室に入る」→「動き回る」→「出て行く」という行動の局面を結びつけ、さらにそれを自分に見えていない文脈と結びつける態度である。これは、他者の心の理解という問題なのだろうか。そうである以前に、顕在的刺激を潜在的刺激と結びつける過程に何かの困難があるのでないだろうか。

この顕在的刺激と潜在的刺激の結びつきは、奥行知覚において求められているものである。奥行きとは、見えている物に裏側があり、物と物とが相互に隠蔽し合っていることに他ならない。私たちは、列車がトンネルの中に隠れたと感じるのであって、消えたとは思はないのは、この奥行き知覚が成立しているからである。私たちはある物を見ながら、可視性がその物と私の身体をすっぽり覆っていて、今、見えているものがその可視性の一部にすぎないことを無意識に感得している。

ここから考えるに、「ただ寝室に入って出ていった」と「探し物をしていた」との差は、心の理論の欠如と言うよりは、奥行知覚の問題、あるいは、全体と部分の知覚の問題、ゲシュタルト知覚の問題ではないだろうか。自閉症の人は、知覚における顕在的部分を潜在的全体性のなかで捉えられないようななかたちで、知覚が断片化している。これがシングルフォーカスの過剰とか、セントラル・コヒーレンスの問題と呼ばれている事態ではないだろうか。他者の心とは、ある人物の顕在的に知覚されている「図」の「地」となっている潜在的全体性のことなのではないだろうか。他者の心とその人の知覚された姿や行動の対比は、「心の理論」論者が想定しているように、内部と外部の対比なのではない。それは、全体と部分の対比なのだ。自閉症者は、全体の把握に問題があるのであるのだ。

6. 我らの自閉症

以上、本論では、自閉症の中核的特徴が、社会性や対人関係の問題である以前に、認知的な問題である可能性を論じてきた。同時に、自閉症のための教育やリハビリテーションとして、感覚と運動の統合を試みる方法も開発されている（岩永 2010；岩永・藤家・ニキ 2008；岩永・ニキ・藤家 2009）。

これまでの主張は、私はその妥当性を信じているとはいえ、いまだ仮説に留まっていることは言うまでもない。今後、さらに実証的に検証されるべきものである。そして、もうひとつのありうる可能性として、障害の中核が認知の障害にあるのは、自閉症と呼ばれる人びとのすべてではなく、少なくない割合であるとはいえる、その一部にすぎない場合である。つまり、自閉症と呼ばれる人々は、根源的にヘテロな集合、あるいは、家族的にしか類似していないような集合である可能性である。私は、この可能性もとても高いのではないかと思っている。

しかし、自閉症と呼ばれる人の、少なくともその一部は、明らかに、対人関係や社会性以前に認知的困難を訴えている。他者理解が困難なのは、そのせいだと主張している。自閉症が障害であるのは、周囲の人びとにとっては、対人関係の困難ゆえに障害であるのに対して、当事者たちにとっては認知上の困難ゆえに障害となっている。

だとすれば、「自閉症」という名が問題になってくる。「健常者」にとって近づきにくい行動や理解の困難な感覚世界を持つ人たちを指す言葉として、「自閉症」という言葉が用いられている。自閉症とは、ある人たちを、「健常者」に関係する限りで捉えたときに生じる見方である。

ここにおいて、自閉症と呼ばれた人々は、その名前をつけた人たちによって断片化して捉えられている。というのも、当事者にとって対人関係や社会性の問題は、障害の本体ではなく、そこから生じる結果、あるいは、その一部にすぎないからである。これまで、研究者たちは当事者の声に耳を傾けないことによって、当事者の「心」、すなわち、その顕在的な行動を包み込む全体性を知覚できないでいた。とすれば、皮肉なことに、われわれ自閉症の研究者たちは、自閉症と同じ問題を抱えていることになる。つまり、他者を顕在的な部分によ

ってしか理解していないのだ。一体、誰が他者を理解できない「自閉症」なのであろうか。

終

参考文献表

- アメリカ精神医学会 (2002) 『精神疾患の分類と診断の手引き (DSM-IV-TR)』新訂 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳、医学書院。
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎 (2008) 『発達障害当事者研究：ゆっくりていねいにつながりたい』 医学書院。
- Baron-Cohen, S. (1997) 『自閉症とマインド・ブラインドネス』 長野敬・長畠正道・今野義孝訳、青土社。
- Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. (1985) 'Does the autistic child have a "theory of mind"?' *Cognition* 21:37-46.
- Baron-Cohen, S., Tager-Flusberg, H., & Cohen, D. J. (1997) 『心の理論：自閉症の視点から』 上・下、田原俊司訳、八千代出版。
- Bettelheim, B. (1973, 1975) 『自閉症・うつろな砦』 1・2、黒丸正四郎ほか訳、みすず書房。
- Cole, J. (1999) *About Face*. MIT Press.
- (2006) *Still Lives: Narratives of Spinal Cord Injury*. MIT Press.
- Frith, U. (2009) 『自閉症の謎を解き明かす』(新訂) 富田真紀・清水康夫訳、東京書籍。
- . Ed. (1994) 『自閉症とアスペルガー症候群』 富田真紀訳、東京書籍。
- 藤家寛子 (2004) 『他の誰かになりたかった：多重人格から目覚めた自閉の少女の手記』 花風社。
- (2005) 『あの屏のむこうへ：自閉の少女と家族、成長の物語』 花風社。
- (2007) 『自閉っ子は、早期診断がお好き』 花風社。
- Gerland, G.(2000) 『ずっと「普通」になりたかった』 ニキリンコ訳、花風社。
- Grandin, T., & Scariano, M. M. (1994) 『我、自閉症に生まれて』 カニングハム久子訳、学習研究社。
- Grandin, T. (1997) 『自閉症の才能開発：自閉症と天才をつなぐ環』 カニングハム久子訳、学習研究社。
- (2010) 『自閉症感覚：かくれた能力を引きだす方法』 中尾ゆかり訳、日本放送出版協会。
- Grandin, T. & Barron, S. (2009) 『自閉症スペクトラム障害のある人が才能をいかすための人間関係 10 のルール』 門脇陽子訳、明石書店。
- Grandin, T. & Johnson, C. (2006) 『動物感覚：アニマル・マインドを読み解く』 中尾ゆかり訳、日本放送出版協会。
- Hall, K. (2001) 『ぼくのアスペルガー症候群：もっと知ってよ ぼくらのことを』 野坂悦子訳、東京書籍。
- Happé, F. (1997) 『自閉症の心の世界：認知心理学からのアプローチ』 石坂好樹ほか訳、星和書房。
- 東田直樹 (2007) 『自閉症の僕が飛びはねる理由：会話の出来ない中学生がつづる内なる心』 エスコアール出版部。

- 東田直樹・東田美紀 (2005) 『この地球（ほし）にすんでいる僕の仲間たちへ：12歳の僕が知っている自閉の世界』 エスコアール出版部。
- Hobson, R. P. (2000) 『自閉症と心の発達』 木下孝司監訳, 学苑社。
- 星空千手 (2007) 『わが家は自閉率40%：アスペルガー症候群親子は転んでもただでは起きぬ』 中央法規。
- 岩永竜一郎 (2010) 『自閉症スペクトラムの子どもへの感覚・運動アプローチ入門』 東京書籍。
- 岩永竜一郎・藤家寛子・ニキリンコ (2008) 『続自閉っ子、こういう風にできます！自立のための身体づくり』 花風社。
- 岩永竜一郎・ニキリンコ・藤家寛子 (2009) 『続々自閉っ子、こういう風にできます！自立のための環境づくり』 花風社。
- 泉流星 (2003) 『地球生まれの異星人：自閉者として、日本に生きる』 花風社。
- 泉流星 (2008a) 『エイリアンの地球ライフ：おとなとの高機能自閉症／アスペルガー症候群』 新潮社。
- 泉流星 (2008b) 『僕の妻はエイリアン：「高機能自閉症」との不思議な結婚生活』 新潮社。
- Kanner, L. (1943) 'Autistic disturbances of affective contact. Nervous Child 2': 217-250.
- 川口有美子 (2009) 『逝かない身体：ALS的日常を生きる』 医学書院。
- 小道モコ (2009) 『あたし研究：自閉症スペクトラム～小道モコの場合』 クリエイツかもがわ。
- 河野哲也 (2005) 『環境に拡がる心：生態学的哲学の展望』 効草書房。
- 子安増生 (2000) 『心の理論：心を読む心の科学』 岩波書店。
- 熊谷晋一郎 (2009) 『リハビリの夜』 医学書院。
- 熊谷高幸(1993) 『自閉症からのメッセージ』 講談社。
- Lawson, W. (2001) 『私の障害、私の個性。』 ニキリンコ訳, 花風社。
- Leudar, I. & Costall, A. (2009) *Against Theory of Mind*. New York : Palgrave Macmillan.
- McKean, T. A. (2003) 『ぼくとクマと自閉症の仲間たち』 ニキリンコ訳, 花風社。
- 森口奈緒美 (2002) 『平行線：ある自閉症者の青春期の回想』 ブレーン出版。
- (2004) 『変光星：自閉の少女に見えていた世界』 花風社。
- 西村ユミ (2001) 『語りかける身体：看護ケアの現象学』 ゆみる出版。
- (2007) 『交流する身体：<ケア>を捉えなおす』 日本放送出版協会。
- ニキリンコ (2005) 『俺ルール！自閉は急に止まれない』 花風社。
- (2008) 『スルーできない脳：自閉は情報の便秘です』 生活書院。
- ニキリンコ・藤家寛 (2004) 『自閉っ子、こういう風にできます！』 花風社。
- ニキリンコ・仲本博子 (2006) 『自閉っ子、深読みしなけりやうまくいく』 花風社。
- Robinson, J.E. (2009) 『眼を見なさい！アスペルガーとともに生きる』 テーラー幸恵訳, 東京書籍。
- Shanker, S. (2004) 'The roots of mindblindness. Theory & Psychology 14': 685-703.
- Shore, S. M. (2004) 『壁のむこうへ：自閉症の私の人生』 森由美子訳, 学習研究社。
- Smith-Myles, B., Tapscoff-Cook, K., Miller, N. E., Rinner, L. & Robbins, L. A. (2004) 『アスペルガー症候群と感覚過敏性への対処法』 萩原拓訳, 東京書籍。
- 杉山登志郎 (1999) 「自閉症と「心の理論」」 中根晃編『自閉症』 日本評論社。
- (2002) 「21世紀の自閉症研究の課題」「自閉症スペクトラム研究」 1: 1-8.
- 高橋智・増渕美穂 (2008) 「アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究：本人へのニーズ調査から」『東京学芸大学紀要 総合

- 教育科学系』59: 287-310.
- 高橋智・生方歩未 (2008) 「発達障害の本人調査からみた学校不適応の実態」 『SNE ジャーナル』14(1): 36-63.
- 高橋智・生方歩未・田部絢子 (2009) 「発達障害の学校不適応の実態と支援--発達障害の本人調査から」 『月刊生徒指導』 39(8): 20-25.
- 高森明 (2007) 『アスペルガー当事者が語る特別支援教育：スロー・ランナーのすすめ』 金子書房.
- Tammet, D. (2007) 『ぼくには数字が風景に見える』 古屋美登里訳,講談社.
- Willey, L. H. (2002) 『アスペルガー的人生』 ニキリンコ訳, 花風社.
- (2007) 『私と娘、家族の中のアスペルガー：ほがらかにくらすための私たちのやったこと』 ニキリンコ訳, 明石書店.
- Williams, D. (1993) 『自閉症だったわたしへ』 河野万里子訳, 新潮社.
- (1996) 『こころという名の贈り物：続・自閉症だったわたしへ』 河野万里子訳, 新潮社.
- (2008) 『ドナ・ウィリアムズの自閉症の豊かな世界』 門脇陽子・森田由美訳, 明石書店.
- Wing, L. (1998) 『自閉症スペクトル：親と専門家のためのガイドブック』 久保紘章・佐々木正美・清水康夫訳, 東京書籍.

(こうの てつや／立教大学)